

脂質生化学研究
Circular

1994

日本脂質生化学研究会
(JCBL)

第36回日本脂質生化学研究会・研究集会のお知らせ

- 期 日：1994年6月16日(木)・17日(金)
- 会 場：北海道大学学術交流会館 (Hokkaido University Conference Hall)
〒060 札幌市北区北8条西5丁目
- 実行委員長：牧田 章
〒060 札幌市北区北15条西7丁目
北海道大学医学部癌研究施設 生化学部門
TEL 011-716-1161 (内線) 6957 FAX 011-717-5286
- シンポジウム：「脂質結合蛋白質—その脂質認識と機能」と
「糖鎖結合脂質—代謝と疾患」(何れも仮題)の
2つのシンポジウムを予定しています。
- 特別講演：中野益男 (帯広畜産大学)
「脂質と考古学—脂質が解き明かす古代の生活」
- 集会参加費：4,000円
- 懇親会：6月16日、総会終了後の夕刻、学会会場より懇親会会場(サッポロビール園、東区北7条東9丁目)までバスが出ます。途中、簡単な市内のご案内を予定しています。会費5,000円。
- 宿泊予約：北海道は観光シーズンに入りますので、ホテルは観光客で混雑することが予想されます。御希望の方は、下記のように旅行会社三慶でお取り扱い致しますので、お早めにお申し込み下さい。
(公共の宿泊施設は、各自で直接お申し込み下さい。)



会場への交通案内
 JR「札幌」駅北口
 地下鉄南北線「さっぽろ」駅
 地下鉄南北線「北12条」駅より
 何れも徒歩約10分、北大正門内すぐ。

宿泊と航空券のご案内

特別割引料金でお取り扱いさせていただきます。お早めにお申し込み下さい。
 パンフレットのご請求、お問い合わせは、下記へお願い致します。

株式会社 三慶 〒170 東京都豊島区東池袋 1-25-17

TEL 03-3987-2666 FAX 03-3987-4659

第36回日本脂質生化学研究会の「シンポジウム」のお知らせ

今回の研究集会では、次のようなシンポジウムを予定しておりますので、奮ってご参加ください。

実行委員長 牧田 章

A 「脂質結合蛋白質-その脂質認識と機能」

世話人 秋野 豊明 (札幌医大・1生化)

A-1 Fatty acid binding proteins and intracellular transport of fatty acids.

Judith Storch (The State University of
New Jersey, Rutgers Department of
Nutritional Sciences)

A-2 α -トコフェロール輸送蛋白質の構造と意義

新井 洋由 (東大・薬)

A-3 血漿脂質転送蛋白質-物性と転送反応の解析

大西 平 (香川医大・生化)

横山 信治 (アルバータ大・医)

A-4 C型レクチンに属する肺サーファクタント蛋白質の脂質結合と機能

黒木 由夫 (札幌医大・生化)

A-5 リン脂質認識機構-免疫化学的アプローチ

梅田 真郷 (東大・薬)

A-6 視細胞G蛋白質の脂質による翻訳後修飾とその生理的役割

深田 吉孝 (東大・教養)

B 「糖鎖結合脂質-代謝と疾患」 (仮)

世話人 牧田 章 (北大・医)

B-1 リポ多糖の構造と神経疾患

飯田 静夫 (東京医歯大・医)

B-2 GPIアンカーとその欠損症、発作性夜間血色素尿症

木下 タロウ (阪大・微研)

B-3 ヒト腎癌細胞における糖脂質硫酸転移酵素の性質と活性調節機構

本家 孝一 (北大・医)

B-4 ガングリオシド・シアリダーゼの性状と機能

宮城 妙子 (宮城県がんセンター)

B-5 N-グリコリルノイラミン酸発現の制御機序-型質から遺伝子まで-

鈴木 明身 (都臨床研・生体膜)

第36回研究集会発表演題の募集

① 演題の申し込み

発表13分討論5分を予定して居ります。

申し込みには挿み込みの原稿用紙をお使いください。これは、このまま印刷になるものではありませんから、タイプでもワープロでも手書きでも結構ですが、黒で読み易く書いてください。

申し込み締切 3月22日 (火) 必着

② 演題採用通知

演題申し込みの審査の後改めて、講演集用原稿用紙をお送りいたします。(4月1日予定)

③ 講演集用原稿締切

4月20日 (水) 必着

④ 研究集会プログラム編成

4月下旬

審査ならびにプログラム編成は、在京幹事、実行委員を中心に、行います。

[演題の申し込み、および講演集原稿送付先]

199-01 神奈川県津久井郡相模湖町寸沢嵐
帝京大学薬学部薬品物理化学教室内
日本脂質生化学研究会事務局 宛

平成六年度 日本脂質生化学研究会総会のお知らせ

上記の総会を平成6年6月16日(木) 16:30~17:00(予定)、
第一会場に於いて開催致します。ご出席賜わりたく存じます。

会長 野島庄七

- 議題
1. 平成5年度事業報告
 1. 平成5年度決算報告ならびに監査報告
 1. 平成6年度事業計画ならびに予算案
 1. その他

平成六年度 日本脂質生化学研究会幹事会のお知らせ

上記幹事会を平成6年6月16日(木) 12:00~13:00 北大百年
記念会館講堂で開催致します。幹事の皆様のご出席をお願い致します。

- 議題
1. 平成6年度日本脂質生化学研究会総会への提案事項の検討
 1. その他

会長 野島庄七

○幹事の皆様には別途、御案内を申し上げます。

○尚、昼食代 1,000円を申し受けます。

脂質研究30余年をふりかえって

国立予防衛生研究所 細胞化学部

赤 松 稔

私が脂質研究に入りましたのは1961年9月で、予研の当時の結核部から東大薬学部の水野伝一先生の研究室に移り、野島庄七先生の教えを受けることになってからのことです。爾来30余年の間に、東大、更に予研化学部で野島先生と研究を共にさせて頂き、また、シカゴ大学で John H. Law 教授、ライス大学で George J. Schroepfer, Jr. 教授と共同研究をする機会を持つなど、終始、大変立派な指導者に恵まれました。また、予研化学部（現・細胞化学部）を主催致しましてからは、これまた非常に良い共同研究者に恵まれ、幸せな研究生活を送ることができましたことを大変嬉しく思っております。

私がこれまで携わって参りました研究対象は、抗酸菌から大腸菌へ、更に高等動物の培養細胞へと変わりましたが、研究の内容は一貫して、脂質、特にリン脂質の代謝調節とその生物学的意義の解明に努めて参りました。

研究のスタートは細菌細胞のリン脂質の一斉分析法の確立でありましたが、その後この方法を利用したリン脂質の細胞内動態の研究へと研究は発展致しました。また途中で枝鎖脂肪酸の生合成機構の解明、更に細菌細胞の脂肪酸生合成の欠損変異細胞を用いた脂肪酸の生物学的役割の解析研究に携わりました。そして最終的には高等動物細胞からのリン脂質生合成欠損変異細胞の分離とその性状解析を行うなど、遺伝生化学的手法によるリン脂質の代謝調節機構の解析とその生物学的役割の解明へと研究は展開致しました。同時にマクロファージの活性化機構の研究から新しい機能性糖リン脂質の開発研究などにも積極的に取り組んで参りました。振り返って見ますとその折々で研究には最善をつくしたと思っておりますが、脂質研究の方法論の目覚しい進歩に伴い、次第にそれなりの研究成果となっていたように思います。

特にここ数年間の研究成果は国際的にもそれなりの評価を得ており、私としては望外の喜びを感じている今日この頃です。私の研究室、つまり予研の細胞化学部のメンバーは極めて限られておりますが、現在も引き続き大変に興味深い成果を積み重ねつつあること、更に、すば

らしいセンスを持った若い研究者がどんどん伸びていること、また私の研究室から大学へ移られた方々が彼の地で素晴らしい業績を挙げられていることなどを見るのは、研究室の責任者としては、嬉しいの一語につきます。

私は本年3月で予研を退官致しますので、これまで自分が行ってきた脂質研究にも終止符を打つこととなりますが、このような幸せな気持ちで研究生活を終えることができますことを本当に嬉しく思っております。山川前会長、野島現会長を始めと致しまして、脂質生化学研究会の皆様方には永年にわたり有益な御助言や暖かい励ましを賜り、誠に有り難うございました。厚く御礼申し上げます。

今後は脂質生化学会の庶務幹事として、皆様方にお目に掛かることと存じますが、今後共どうぞ宜しくお願い申し上げます。

最後になりますが、会員の皆様方の御研究の御発展と御成功、並びに国際的にも大変にレベルの高い日本脂質生化学研究会の益々の発展を心よりお祈り申し上げます。

1994年1月 記

油と水 —— 思い出すまに

北大医学部 牧田 章

脂質生化学研究会の第1回研究集会は1961年だそうです（脂質生化学研究 Circular 1993）。その数年前、1950年代後半は、私の記憶では、今日でも使われている脂質の研究法の幾つかはこの頃に初めて使われ始めたと思います。複合脂質の分離に硅胶クロマトが取り入れられたのもこの頃ですが、カラムクロマトでは展開は有機溶媒だけであり、水は使いませんでした。ところが、少しあと（1961年）、薄層クロマトでリン脂質を分離する報告が *Biochemische Zeitschrift*（1967年から *Eur. J. Biochem.* となる）にあったので、糖脂質もリン脂質と同じ溶媒系、クロロホルム：メタノール：水で展開すると“切れ”よく分離したのでたまげました。それ以前（1956年）にも Folch の分配法があり、リポ蛋白の分画もありましたが、脂質の分離には水は縁がないものと思い込んでいたので水の効用を知ったわけです。硅胶より吸着力の強い活性化硅胶マグネシウム（フロリ

シル）のカラムクロマトでは一、二、三糖くらいまでの糖脂質はきれいに分離しましたが、これは私が山川研究室で実験していた真夏の話であって、冬などはうまくいかないのです。これも水の効用であり、あとになってフロリシルに水を定量的に加えることによって各種の脂質を分画する論文が *J. Lipid Res.* に出ていました。湿度の高い東京の夏ではフロリシルは糖脂質の分離に適度な水を含んでいたわけで、冷房の効いた昨今の研究室や、湿度の低い北海道ではうまく分離できなかったと思います。

細胞の脂質二重層から剥ぎ取った *in vitro* の脂質は水系ではミセルを形成するので、脂質の酵素反応では界面活性剤で分散させて行いますが、細胞では糖脂質の糖鎖合成はゴルジ内で、糖脂質前駆体も合成酵素もゴルジ膜にアンカーしたままの状態で行進するとみられています。リソゾームでの分解反応に界面活性剤的働きをするサボシンのような蛋白質はゴルジ体では知られていません。N-グリカンの生合成の少なくとも初期反応は膜結合で起こりますが、糖脂質の糖鎖合成酵素のなかには膜に埋没している筈の前駆体の脂質部分（セラミド）も認識して

働く（換言すれば、糖脂質合成にのみ働く）ものがあって、上記の考えでは説明が難しい。

最近、スルファチドは肝細胞増殖因子 (HGF) と結合することがわかりました。in vitro の実験ばかりではなく、スルファチドをもつ細胞とも結合するので生理的な現象でしょう。HGF はヘパリンやヘパラン硫酸結合性増殖因子の一つであり、コンドロイチン硫酸など他の生体硫酸化多糖とは結合しません。高分子、水溶性のヘパリン／ヘパラン硫酸・プロテオグリカンと低分子、非水溶性のスルファチドは硫酸化糖（鎖）の構造も違うので、HGF との結合機序も一概に同じとは云えないかも知れません。ヘパリン／ヘパラン硫酸糖鎖と増殖因子（そのほかの蛋白質も）の相互作用や、増殖因子受容体を介したシグナル伝達の機序に果たす役割が注目されていますが、低分子の硫酸化脂質についてはこれからである。

大学教育改革 前期課程教育の改革

東京大学教養学部 川口 昭彦

新制大学の発足から40年以上経過し、大学を取り巻く環境は大きく変化した。この環境変化の要因の主なものは、①価値観の多様化、②国際交流の増大、③通信・コンピュータ技術の発展と普及であろう。これらの変化は、社会的には我々の目にはっきり見える形で現われている。例えば、ベルリンの壁やソビエト連邦が崩壊し、我が国では昭和55年政治体制そしてバブル経済が崩壊してしまった。バブルが弾けると前後して、社会の中に新しい動きがでてきたように思われる。それは、社会や文化、あるいは世界や地球環境に関心が向いてきたことであろう。すなわち、消費社会が終焉し、新しい生活環境の創造が始まっていると言えよう。

このような社会の大きな変動にともなって、学問のあり方それ自体にも根本的な変化が起こっていることは否定できない。それぞれの学問分野でめざましい発展が見られることは言うまでもないが、それに加えてとりわけ顕著なのは、あらゆる分野において推進されている国際化の動きと、異なる分野間で加速度的に進行しつつあるボーダレス化現象であろう。しかしながら、大学（少なくとも国立大学）は、これらの社会的変動に鈍感であったように思われる。大学を構成している教官など個人のレベルでは対応し、努力してきたが、組織としては、ほとんど対応していなかったのが現実ではなかろうか。社会の中で最も進歩的であり、社会の動向に敏感であるべき大学が、このような状態であることは重大問題である。将来の社会の担い手を養成すべき場としての大学が、こうした流れを適切な形で反映することはいわば当然の責務であり、40年以上を経た教育体制を抜本的に改革する必要があった。

いわゆる「一般教育」は、人文科学・社会科学・自然科学・外国語・保健体育の5分野構成となっていた。しかしながら、社会の変化にともなう学問の国際化・学際化の動きをふまえてみると、このように学問分野を古典的な図式にのっとって截然と分割する発想が、いまや世界の大きな流れにそぐわないものであることは明らかである。たとえば環境問題ひとつとってみても、そこには人間のモラルを問う人文科学、社会制度の仕組みを探る社会科学、環境破壊の原因や構造を究明

する自然科学、住民の健康保持を追求する保健体育など、すべての学問領域が複雑に絡み合ってくるであろうし、この問題をめぐる外国の現状を知るために、あるいは外国の研究者や活動家と交流するために、外国語の知識や技能もかならず必要とされるであろう。こうした新しい問題の出現は当然のこととして、諸分野の自由な交流を前提とした新しい教育上の枠組みを要求することになる。東京大学教養学部では、平成4年4月より学部前期課程（1・2年生）の教育カリキュラムを全面的に改定した。以下、この改革の骨子を紹介したい。

1) 従来の人文科学、社会科学、自然科学、外国語、保健体育という5大分野による分類を廃し、前期課程でおこなわれる授業科目を新たに「基礎科目」「総合科目」「主題科目」の3種類に大別する。これは単なる科目編成の衣替えではなく、大学の前期課程で本来やっておくべきこと、前期課程でこそできること、前期課程でなければならないこととは一体何か、という発想から出発して、現代社会にふさわしい「リベラル・アーツ」教育を実現するための枠組みとして新たに設けるものである。

2) 「基礎科目」とは前期課程において最小限身につけておくべき基本的な知識・技能（テクネー）などを習得するためのもので、文科系は外国語、情報処理、方法論基礎、基礎演習、スポーツ・身体運動の5科目、理科系は外国語、情報処理、基礎講義、基礎実験、スポーツ・身体運動の5科目とし、いずれも必修科目とする。

①外国語は2か国語を必修とし、従来の受信型から発信型への転換をめざす。特に英語に関しては、視聴覚設備の利用による大人数授業とこれを補完する小人数授業の組み合わせ方式をスタートさせる。

②情報処理は現代において不可欠の知的技能であるが、文科系と理科系では要求される内容やレベルが異なるであろう。

③方法論基礎（文科系）は、人文・社会科学の学習に不可欠な研究方法の講義を中心に、文科系諸領域の専門課程に進むための学問的態度を学ばせる。基礎講義（理科系）は自然科学の学習に不可欠な研究方法の講義を中心に、理科系諸領域の専門課程に進むための学問的態度を学ばせる。

④基礎演習（文科系）は、諸領域の基本的なトピックスについておこない、資料の収集や調査の方法、日本語による口頭発表ならびに論文作成能力を養う（原則として小人数ゼミ形式）。基礎実験（理科系）は自然科学系の諸領域について、研究の基本的な手続きを身につけるためにおこなう。

⑤スポーツ・身体運動は、あらゆる面で成長期にある前期課程の学生に身体を使うことの重要性を認識させ、社会生活を営む上での基礎体力を養うとともに、種々のスポーツ等を通じて心身のバランスのとれた健全な人材の育成に資する。

3) 「総合科目」とは現代において共有すべき知の基本的枠組み（パラダイム）を多様な角度・観点から習得するためのもので、A. 思想・芸術、B. 国際・地域、C. 社会・制度、D. 人間・環境、E. 物質・生命、F. 数理・情報、の6系列から成り、それぞれに先端的なトピックスを扱う授業科目を配置する。履修方法は一定の範囲内で選択必修を課し、あとは自由選択とする。

この科目再編成は、人文・社会・自然といった従来の学問分野をいったん解消し、現代において一体何が問題となっているのか、そしてそれらの問題にアプローチするにはどのような切り口がありうるか、という発想から新たに考案されたものである。もちろん各系列はそれぞれ孤立した閉鎖系をなすのではなく、たがいに密接な相関性によって結ばれており、この分類自体も大まかな入り口の区別を示す一つのモデルにすぎない。したがって、授業内容も現代における学問の広がりや多様性を反映する一方、単なる断片的な知識の寄せ集めにとどまらず、全体としては深いところで呼応しあい、有機的関連をもつことになる。

4) 「主題科目」とは特定のテーマを設定して随時開講されるもので、テーマ講義と自由研究ゼミナールから成り、自由選択科目とする。

①テーマ講義は特定の領域横断型トピックスについて複数教官が講義するものである。

②自由研究ゼミナールは教官が各自の関心に応じて自由な主題を設定し（あるいは学生が自主的にテーマと講師を選び）、小人数でおこなうゼミ形式の授業で。

今回の改革の目的は、カリキュラムの多様化と学生から見た選択の自由化であった。これは、単に学生の負担軽減を目的としたのではなく、「必修」で学生を縛るのではなく、学生の自主的な勉学意欲をかき立てることを目的としたものである。実際、2年間で履修する最低単位数の合計は、従来と変化なく、必修の単位数を従来より大幅に減らした。

この改革に対する建設的なご意見・ご批判をお願いする次第であり、また、どのような人材を供給することになるか10年後位に評価してみたい。

脂質生化学研究会 (三四郎池の周辺にて)

帝京大学医学部第一生化学

島崎 弘幸

男は、まだ、昔話を語るにふさわしい”年ではない”と思う。ただ、研究会について、何かを書こうとすると、研究会の現在と未来について、書くべきものを持たない男には過去しかない。昨年、研究会の会長が山川民夫先生から野島庄七先生へ変わった。それに伴ない、帝京大学に置かれていた事務局も学会事務センターへと移った。男は失業した。

男が、”日本脂質生化学研究会”を初めて知ったのは、1965年のことである。元会長の原一郎先生の下で、学生アルバイトを始めたのが、そもそも、この研究会とのなれ染めであった。当時の男に、学会が何か、研究会が何か、分かるはずもなかったけれど。

当時、研究会の事務局は舟橋 三郎先生(東大農学部)にあった。原先生の指示で、男はそれから数年の間、研究会の予稿集を発行する頃になると、手伝いのために船橋研へ通った。その時期は決まって、グミの実が赤くなるころで、三四郎池の方から農学部へ行く道すがら、垣根のグミの実を2、3個摘んで、ちょっと酸っぱい思いをかみしめながら通っていた。舟橋先生は大先生でありながら、バイト学生に対しても、決して威張ることはなかった。あったかい先生で、男はいまでも尊敬している。

舟橋教授室に、最初に行った時のこと。男は無遠慮にも、初めて見る部屋のあちこちを眺め回していた。右手の壁に、大きな額縁があって、そこに鈴木梅太郎博士の写真が飾ってあった。聞けば、初代の教授だと言う。当時、若かった男は痛く感動した。教科書でしか知らない人が、ここに居たのかと思った。そのような男の言動に好感を持たれたのか、舟橋先生はちょっとほほ笑まれた。これが舟橋先生の笑顔を見た最初である。二度目の笑顔もその後に続いた。それは、鈴木教授の額縁の大きさに比べて、横に並んでいる歴代教授の額縁が段々と小さくなっていることを、男が、愚直にも何故かと聞いたときであった。ちょっとほほ笑まれたあと答えてくれた。その答えは、ここでは割愛するが、その後の先生の笑顔は、この男の脳裏に無い。あまり笑ったりしない、もの静か

な先生であった。あれから、あの教授室に入ったことは無いけれど、舟橋先生の額縁の大きさがどんなものか、ちょっと気になる。

1969年、脂質生化学研究会の事務局は、舟橋先生の下から、原先生の下に移った。三四郎池を見下ろす、東大医学部の本館、血清学教室である。そこで、男はこの研究会の事務を全て任されることになった。会費の徴収や、入退会の手続き、あるいは会報や、研究集会の準備等々である。全て、原先生の指示どおりに働いた。

原先生は、会の運営を、ほとんど全て、山川先生(前会長)に相談していた。従って、男は、山川先生に、何かと指示を仰ぐことも多くなった。現在の山川先生のみを知っている、若い読者は驚くかも知れないが、当時、40歳代の半ばであった山川先生の風貌、雰囲気、言動、いずれも、今とほとんど変わらない。これは驚異である。幹事会の集会などでも、山川先生は、いつも、刑事コロンボのようなコートの前を掻き分け、ちょっと前かがみの身体を斜めにして歩いて来た。なぜ斜めかと言うと、先生はいつも、後ろに続く誰かと、何かを話しながら歩く人であり、身体は自然に斜めになる。会議室に、斜めになって入って来ても、さっと、メインテーブルに座って、”ピタリ”とおさまる人であった。

当然ここでは、現会長の野島先生についても避けて通れない。当時、野島先生は東大(薬学部)の助教授であった。山川先生が年を経て変わらない代表なら、野島先生は変わった代表である。当時は、ゴルゴ13(漫画を見ない人は分からないかも知れないが)のような雰囲気を持った人で、男など、安易に近づくことさえ出来なかった。山川先生がナタの怖さなら、野島先生は日本刀の怖さで、うっかり2m以内に近づくものなら、ズバッと切られそうであった。勿論、叱られたことも、切られたこともないけれど。ただ、近頃の野島先生が、いつもニコニコしているのは、藤田まこと、演じるところの必殺仕事人のように、表の世界と、裏の世界を、使い分けているだけではないかと、男は、いまだに、ふと心配になるのである。

男が帝京大学に就職した時、研究会の事務局は植田先生の下に移っていた。通算で27年ほど、男は、事務局のお手伝いをしながら、歴代の研究会の幹部、幹事の先生方をしっかり”観察”してきた。門前の小僧である。ただ、残念なのは、男に、それを生かす能力が無い。

会の活動状況

1 第35回日本脂質生化学研究会・研究集会の開催

実行委員長：赤松 稔（国立予防衛生研究所・細胞化学部）

日時：平成5年6月4日（金）、5日（土）

場所：東京・全共連ビル

演題数：シンポジウム5題、一般演題100題

参加数：325名

今回の研究集会では赤松 稔先生を始めとして、国立予防衛生研究所・細胞化学部のスタッフの方々に大変お世話になりました。深謝致します。研究集会につきまして、別掲の赤松 稔実行委員長長の報告をご参照ください。

2 第35回日本脂質生化学研究会総会

平成5年6月4日（金）午後5時30分より、全共連ビルの第一会場において講演終了後開催された。

総会次第

(1) 開会の辞

庶務幹事 赤松 稔

議事に入る前に亡くなられた小峰仙一、沼正作、松原淑子、米山良昌の4先生方に対し、全員でご冥福の黙祷を捧げた。

(2) 議事

司会 会長 野島庄七

1) 平成4年度事業報告及び決算報告

平成4年度の事業内容が配付資料に沿って報告された。通常の事業報告の外に、第2回幹事会（平成4年12月4日、東京・竹橋会館で開催）において了承された、「日本脂質生化学研究会事務局の業務の一部を学会事務センターへ平成5年度から委託する」事項につき説明がなされた。委託に伴う経費については、当面、会費の値上げをしないで実施できるとの見通しが報告され、拍手をもって承認された。また、平成4年度決算報告については植田前庶務幹事より報告された。

2) 会計監査報告

前会計監査 野島庄七

平成4年度決算報告につき監査結果が報告され、承認された。

3) 平成5年度事業計画案及び予算案

平成5年度における、第35回日本脂質生化学研究会・研究集会、第35回総会、第1回および2回幹事会の事業計画案が説明された。予算案については、日本脂質生化学研究会事務局の業務の一部委託に伴う委託時経費（初年度経費）及び事務委託費（経常的経費）について説明がなされ、承認された。

4) 日本脂質生化学研究会会則の変更について

第5条役員の条文のうち、本会運営の役員として、従来の役員に加えて、会計幹事を新たに設けること、および、付則の条文のうち、本会の事務局を帝京大学薬学部薬品物理化学教室に置くことなど下記のように変更し（下線は変更部分）、平成5年度ならびに6年度から施行することが了承された。

第5条 役員

本会は、その運営のために次の役員をおく。

- (1) 会長1名、庶務幹事1名、会計幹事1名、会計監査1名、幹事若干名をおく。
- (2) 会長、庶務幹事、会計幹事、幹事は幹事会を構成し事務の一切を処理する。幹事会は決定事項を総会に報告し、その承認を得るものとする。
- (3) 会長、庶務幹事、会計幹事、会計監査の任期は2年とし、幹事の任期は4年とする。重任はさまたげない。

附 則 (1) 本会則は、総会の承認を経て変更することができる。

(2) 本会の会費は、幹事会で決定し、総会の承認を得るものとする。

(3) 本会の事務局は、帝京大学薬学部薬品物理化学教室に置く。

（〒199-01） 神奈川県津久井郡相模湖町沢嵐1091

5) 新役員の推薦

齊藤国彦先生を本会の名誉会員に推薦することが満場一致で承認された。また、新しい幹事候補者の推薦が求められ、適宜、会長まで推薦して欲しいとの要望がなされた。

6) 日本学術会議第16期会員推薦について

日本学術会議第16期会員推薦の過程が説明され、日本脂質生化学研究会を推薦のための学術研究団体として登録する申請を行なったとの報告がなされた。また、会員候補者の推薦人を赤松稔氏に依頼することが決められた。

7) 平成6年度研究集会の準備状況の報告

実行委員長 牧田 章教授

会期は、平成6年6月16日（木）、17日（金）の2日間、北海道大学・学術交流会館で開催される旨の報告があり、多数の参加が要請された。

8) 平成7年度研究集会の実行委員長の選出

実行委員長として、数名の候補者の名前が上げられたが、決定するまでに至らず、野島会長にその決定を一任することが了承された。

9) 文部省科学研究費「脂質データベース」について

会計監査 植田伸夫

本企画の現状について説明があり、今後とも引き続き推進していく旨の報告がなされた。

3 平成5年度第一回幹事会

平成5年6月4日（金）正午より、東京・全共連ビル内会議室において開催された。

出席者54名（氏名略）。総会に提案すべき事項を審議した。

議事内容は、総会と同じ。

4 平成5年度第二回幹事会

平成5年11月27日（土）午後6時より、日本薬学会会長井記念館で開催された。

出席者 山川民夫（名誉会長）、野島庄七（会長）、赤松 稔（庶務幹事）、
瀬高守夫（会計幹事）、植田伸夫（会計監査）阿部敏明、荒木英爾、
大島美恵子、大橋昌子、菊川清見、古賀洋介、児島英也、齊藤政樹、
島崎弘幸、鈴木明身、脊山洋右、玉井洋一、内藤周幸、中川靖一、西村顕治、
飯田静夫、牧田 章、村松敏夫、山田晃弘、和久敬蔵、（以上25名）

議事

(1) 平成5年度事業報告

- ①会員数 正会員725名(平成5年11月1日現在)
但し、平成5年 新入会 30名
退 会 41名

名誉会員15名(平成6年度事業計画の項参照)

賛助会員21社(同上)

- 役員 会長 野島庄七 (任期平成6年12月31日迄)
庶務幹事 赤松 稔 (同上)
会計監査 植田伸夫 (同上)
幹事 (平成6年度事業計画の項参照)

②事業

イ) 第35回研究集会の開催(実行委員長 赤松 稔 氏)

平成5年6月4日、5日

演題数: シンポ 5題、一般 100題

参加数: 325名

ロ) 脂質生化学研究 35巻の発行(本文430頁)

ハ) 脂質生化学研究Circular 1993の発行(本文21頁)

ニ) 総会及び幹事会の開催

総会 平成5年6月4日(金) 全共連ビル(東京)に於て

第1回幹事会 平成5年6月4日 全共連ビル

第2回幹事会 平成5年11月27日 日本薬学会長井記念館

(2) 平成5年度決算報告(決算表参照)

決算表に基づいて説明がなされた。事務局の業務の一部を学会事務センターに委託したことによる支出の増大は比較的少ないことが判明した。

(3) 役員改正および新幹事の推薦

内藤周幸幹事を本会の名誉会員に推薦することが承認された。平成5年12月31日で任期の切れる幹事10名についても、本人の同意を得て再任をお願いする旨提案がなされ、承認された。また、新幹事として、大木和夫(東北大・理)、竹縄忠臣(東大・医科研)、村田紀夫(基生研)の3氏が推薦され、承認された。

(4) 第36回(平成6年度)研究集会の準備状況の報告

牧田 章実行委員長より、シンポジウム企画、演題発表の会場・タイムスケジュール、懇親会等につき説明がなされた。また、参加人数の確保のため懇親会の事前登録制が提案されたが、実行委員長の下で更に検討することになった。(本サーキュラー参照)

(5) 第37回(平成7年度)研究集会実行委員長の選出

各幹事から推薦された20余名の候補者の中から飯田静夫教授(東京医歯大・医)が選出された。

(6) 平成6年度事業計画

- ①会員数 正会員微増の見込み
名誉会長 山川民夫

会長 野島庄七 (任期平成6年12月31日迄)

庶務幹事 赤松 稔 (同上)

会計幹事 瀬高守夫 (同上)

会計監査 植田伸夫 (同上)

幹事

(任期 平成6年12月31日迄)

宇田 裕、島崎弘幸、鈴木康夫、高野達哉、塚谷博昭、二木鋭雄、宮澤陽夫、

(任期 平成7年12月31日迄)

赤沼安夫、秋野豊明、阿部敏明、荒木英爾、有田 奈、安藤 進、猪川嗣郎、板倉弘重、板坂 修、市原宏介、伊藤俊洋、井上圭三、入谷信子、遠藤 章、大島美恵子、大橋昌子、岡田伸太郎、岡本光弘、奥田拓道、奥山治美、小野輝夫、川口昭彦、菊川清見、斉藤政樹、渋谷 勲、清水孝雄、鈴木明身、腎山洋右、谷口直之、玉井洋一、中川靖一、中野益男、西村顕治、野沢義則、野間昭夫、水柿道直、武藤泰敏、和久敬蔵、

(任期 平成8年12月31日迄)

上田隆史、加納英雄、賀佐伸省、北 徹、楠瀬正道、児島英也、菅野道廣、武内 望、武富 保、千田信和、永井克孝、橋本 隆、森 龍哉、林 陽、原島圭二、飯田静夫、平山 修、穂下剛彦、牧田 章、松沢佑次、三成 脩、村松敏夫、山下 哲、山田晃弘、山本 章、渡辺清博、

(任期 平成9年12月31日迄)

猪飼 篤、池沢宏郎、石塚和夫、石橋輝雄、伊藤精亮、大木和夫、鬼頭 誠、古賀洋介、竹縄忠臣、田辺 忠、村田紀夫、矢野郁也、山本尚三、

(以上84名)

名誉会員

今井 陽、数野太郎、金田尚志、日下喬史、斉藤国彦、坂上利夫、高橋善弥太、内藤周幸、野島庄七、野田万次郎、藤野安彦、堀 太郎、松本 亮、山川民夫、山崎三省、山添三郎

(以上16名)

②事業計画

イ) 第36回研究集会の開催

平成6年6月16日(木)、17日(金)

北海道大学・学术交流会館

ロ) 脂質生化学研究36巻発行

演題募集(サーキュラー発行)

2月 1日

演題申込締切

3月22日

採用通知(原稿用紙発送)

4月 1日

原稿締切

4月20日

プログラム編成会議 4月下旬
 入稿 4月下旬
 講演集発送 5月下旬
 ハ) 脂質生化学研究会サーキュラー (1994年) の発行 2月1日

ニ) 会議
 日本脂質生化学研究会総会 平成6年 6月16日
 第1回幹事会 平成6年 6月16日
 第2回幹事会 平成6年12月

(7) 平成6年度予算 (予算表参照)

研究集会補助金を70万円に増額することが提案され、第36回研究集会から実施することが了承された。

賛助会員

エーザイ株式会社 10口

塩野義製薬株式会社 以下5口
 株式会社バイオックス研究所
 キッセイ薬品工業株式会社

三共株式会社 以下4口
 住友製薬株式会社
 東ソー株式会社
 藤沢薬品工業株式会社
 山之内製薬株式会社

株式会社資生堂 以下3口
 株式会社東京化学同人
 第一製薬株式会社
 大日本製薬株式会社
 東京田辺製薬株式会社
 雪印乳業株式会社

花王株式会社 以下2口
 大塚製薬株式会社
 日清食品株式会社
 日本ルセル株式会社
 日本商事株式会社
 株式会社ヤクルト本社

○平成5年度決算表および平成6年度予算表

収入の部 項目	平成5年度		平成6年度
	予算	決算	予算
正会員会費	2,122,000	2,199,000	2,190,000
入会金	100,000	58,000	50,000
賛助会員会費	680,000	730,000	750,000
講演集売上	150,000	158,000	150,000
広告収入	850,000	824,000	850,000
利子	50,000	1,276	10,000
寄付金	0	0	0
雑収入	0	42,600	0
小計	3,952,000	4,012,876	4,000,000
前年度よりの繰越金	2,171,954	2,171,954	2,281,380
計	6,123,954	6,184,830	6,281,380

支出の部 項目	平成5年度		平成6年度
	予算	決算	予算
研究集会補助	500,000	500,000	700,000
会報製作費	300,000	221,450	250,000
講演集製作費	1,800,000	1,285,040	1,350,000
旅費	55,000	7,800	100,000
郵送料・通信費	380,000	340,130	450,000
事務用品費	250,000	282,253	100,000
会合費	130,000	194,502	200,000
謝金	50,000	0	50,000
総会経費	5,000	0	5,000
事務経費	100,000	100,000	100,000
事務委託費	600,000	664,375	600,000
委託時経費	303,000	305,700	0
雑費	30,000	2,200	30,000
小計	4,503,000	3,903,450	3,935,000
次年度への繰越金	1,620,954	2,281,380	2,346,380
計	6,123,954	6,184,830	6,281,380

第35回日本脂質生化学研究会

国立予防衛生研究所
細胞化学部 赤松 穰

第35回日本脂質生化学研究会は昨年6月4日、5日の2日間、東京、千代田区平河町の全共連ビルで開催された。

研究会は登録者325名、一般演題100題（一題18分）、シンポジウム5題（一題30分）で三会場に分かれ、ほぼ例年と同じ規模であった。シンポジウムは第一日目の午前中に一般演題を行わずに開催し、参加者全員に聞いて頂けるように配慮した。シンポジウムは「脂質生化学と分子遺伝学との接点」と題し、脂肪酸、コレステロール、リン脂質、ホスホリパーゼC、糖脂質と脂質研究の全分野を網羅し、それぞれの分野で分子遺伝子を応用した脂質研究のトピックスとして、村田紀夫（基生研）、馬淵宏（金大医）、加納英夫（札医大）、竹縄忠臣（東大医科研）、古川鋼一（長崎大、医）、の各先生から大変興味深い御講演を頂いた。演者の先生方にはお忙しい中をご講演を快諾して頂き、この場をお借りして厚く御礼申し上げたい。

一般演題も三会場に分かれ、最後まで熱心な討論をして頂き、主催者として、会員の皆様に感謝申し上げたい。

総会は第一日目終了後第一会場で、また懇親会は同じく第一日目の午後6時から全共連ビル8階のマツヤサロンで行われ、懇親会参加者は106名で終始なごやかに行われた。

今回の学会の特長は、シンポジウム開催時間帯では一般演題を行わなかったこと、従ってシンポジウムに非常に多くの会員の参加があり、演題も脂質学会の分野をすべてカバーし、しかも最新のジャンルを加味した形で行われたために、大変に好評であった。また、一般演題も東京での開催の故か例年よりも多少多く、三会場とも非常に盛況であったが、各会場とも十分な広さを確保したのでゆったりした雰囲気の中で最後まで熱心な討論が行われ、主催者として大変に嬉しく思った。

この会は研究集会であるので通常の学会の雰囲気とは異なり、主催者としてはいわゆる仲良しクラブとして運営するように努力したつもりであるが、参加者の皆様方がそのように感じて頂けていたら望外の幸である。

第34回国際脂質生化学会議（ICBL）

見聞記

帝京大・薬 杉浦 隆之

平成5年（1993年）の国際脂質生化学会議（ICBL）は、8月25日（水）から28日（土）にかけてオランダの北海に近いNoordwijkerhoutにあるコンgresセンターで開かれた。筆者は今回ちょうどこの会議に参加する機会があったので、その様子・印象を簡単にここで御紹介したい。

ICBLが東京で開催されたのは、昭和63年（1988年）のことまで記憶に新しいところであるが、国際会議という名前がついている割には長いことヨーロッパを中心に開かれてきた学会で、東京のあともイタリア、ドイツ、スペイン、フランスとヨーロッパが続いて、今回がオランダであった。ちなみに次回（1994年）はスコットランドで、その次（1995年）は大西洋を越えてアメリカで開かれる予定になっている。

今回、会議を主宰されたのはUtrecht大学のK.W.A. Wirtz教授。Lipid transfer proteinの研究で有名な方で、ご存じの方も多いと思う。Organizing committeeには、このほか van den Bosch教授（treasurer）、van Golde教授といった方々が入っていて、オランダの脂質研究グループあがりの開催といった感じである。今回のICBLは、長年にわたってオランダの脂質研究グループを率いてこられたL.L.M. van Deenen教授（今回の会のhonorary presidentでもある）の退職を記念した会も兼ねたもので、Waite教授、Lands教授ら、van Deenen教授と親しい方々がヨーロッパからだけでなくアメリカからも多数集まり、なかなかの盛況であった。参加者数は約220名で、ICBLの年会としてはかなり大きな方ではなかったかと思う。日本からは12名の参加であった。

ICBLでは3つのテーマを選んでそれを中心に招待講演・口頭発表のプログラムを組むことが慣例となっている。今回テーマとして取り上げられたのは「Cellular phospholipases and phosphoinositide kinases in receptor function and signal transduction」、「Lipids and recognition」、「Intracellular lipid transport and metabolism」の3つであった。これらのテーマに関連する招待講演が特別講演も含めて15題、一般演題の中から関連する演題として口頭発表に選ばれたのが12題。一方、ポスター発表はこれらのテーマに縛られず、脂質に関する幅広い分野の研究が対象で、今

回は約130題のポスター発表があった。

会場は最寄りの駅(レイデン)からバス2本を乗り継いで行くといった余り交通の便のよいところではなかったが、駅には直通のシャトルバスが(少なくとも筆者が着いたときには)思いがけず待っていて難なく着くことができた。アムステルダムのスキポール空港からタクシーに乗っても20分ぐらいで、タクシーを利用された方も多かったのではないと思う。オランダという土地柄、右をみても左をみても山とか丘とかいった目印になるようなものは全く見あたらず、道を間違えてもしたら右往左往するのはまず覚悟しなければならなかったところであった。ところでセンターの周辺には期待に反して観光するようなものは何もなく、海岸までは歩いて30分とかいうことだった。たしか去年のサーキュラーや送られてきたパンフレットには「美しいリゾート地」と書いてあったような気がしたのだが----というわけで、一旦、コンgresセンターに入ってしまったからは、2日めのエクスカージョンの時間を除けばほとんど外にでることはなく、朝から夕方までカンゾメになったまま充分勉強に集中することができた(?)という次第である。なお、会場になったコンgresセンターには会議場のほか、宿泊施設、2つのレストラン、バー、リクリエーション施設等が完備されており、大変立派なものであった。

会議は、25日夕刻、Registration、Opening address のあとC.R.H. Raetz博士による特別講演「Bacterial endotoxins: Extraordinary lipids that activate eucaryotic signal transduction」で始まった。Raetz博士の講演では、Lipid X (2,3-diacylglucosamine 1-phosphate)の発見の経緯と、それに基くLipid A 生合成ルートの解明の概略が話されたほか、LPS受容体、抗LPS活性をもつLipid Aアナログ等についても話があった。Raetz博士の講演は、Raetzグループの他の追従を許さぬ一連の研究の成果を中心に、LPSについてのトピックスを分かりやすく述べたもので、開幕講演にふさわしく、聴衆を十二分に満足させるものであった。

26日は「Cellular phospholipases and phosphoinositide kinases in receptor function and signal transduction」のテーマに関連する招待講演と口頭発表が行われた。招待講演の題を列記すると、「Topological studies on phosphoinositide metabolism in relation to signal transduction」(H. Chap)、「Phosphatidylinositol 3-kinase」(L.C. Cantley)、「Structure, function and regulation of human cytosolic phospholipa

se A2」(R.M. Kramer)、「Regulation of phospholipase C isoforms」(S.G. Rhee)、「Phospholipase D as a novel signaling enzyme in mammalian cells」(M. Liscovitch)、「一般発表では「Lysophospholipase and transacylase activities of human cytosolic high molecular weight phospholipase A2」(E.A. Dennis)、「Cytokine-stimulated secretion of group II phospholipase A2 by rat mesangial cells: Its contribution to arachidonic acid release and prostaglandin synthesis by cultured rat glomerular cells」(J. Pfeilschifter)、「Rapid attenuation of receptor-induced diacylglycerol and phosphatidic acid by phospholipase D-mediated transphosphatidylolation: Formation of bisphosphatidic acid」(W.J. van Blitterswijk)、「Phosphatidylinositol-specific phospholipase C from *Bacillus cereus* at the lipid-water interface: Interfacial binding, catalysis and activation」(J.J. Volwerk)、「Ganglioside-peptide interaction as a mechanism for modulation of calmodulin-dependent enzymes by gangliosides」(東、三菱化成生命研)などがあった。3日間のなかでは演題数が一番多く、内容也多岐にわたってかなり盛りだくさんであった。

一方、ポスター発表にはロビーなど3カ所があてられ、ポスターは3日間通して展示された。26日の午後の1時間半、27日の午前中の1時間半がポスター発表のためのディスカッションの時間であったが、会場の宿泊施設に泊まっていたため、それ以外にもポスターを見たり、関係者を見つけて話をきく時間は十分にあったことを付記しておく。

27日は午前中「Lipids and recognition」に関する招待講演が行われた。「Phospholipid three-dimensional structure determines antigenicity」(A.S. Janoff) (なぜかブッシュ前大統領までが登場する楽しい発表で笑わせてくれた)、「Anti-phospholipid monoclonal antibody as a structural template for studying lipid-protein interaction」(井上、東大薬)、「Bifunctional role of glycosphingolipids as mediator of cell-cell recognition and modulator of transmembrane signaling」(箱守、Sea title)。箱守先生の発表では、途中プロジェクターがアクシデントのためとまってしまう、大部分のスライドが映せなくなってしまう。ところが箱守先生は少しもあわてず、間をおかず、身ぶり手ぶりの実演つきで発表(熱演)を続けられ聴衆に多大な感銘を与えた。これには座長も特別の賛辞を送り、

その場は大いに盛り上がったのであった。この日の午後は、恒例のコングレスツアー。全員バスに分乗してオランダの風物を観光しにでかけた。風車、古い漁村を見学してから、アイセル湖を遊覧船でわたってマルケン島へ。せっかくだからと、行きの船では一番上の展望甲板に急いで登ったが、夏とは思えない寒さ、帰りは迷うことなく船室に直行し、某先生留学時の裏話等楽しい話を伺った。フォーレングダムでのディナーを終えて、いささか疲れ果ててセンターに戻ったのは夜中の12時過ぎであった。

28日は「Intracellular lipid transport and metabolism」に関する発表が行われた。紙面の関係で招待講演の題のみをあげると、「Regulation of sphingosine metabolism and implication for cell regulation」(A. H. Merrill)、「Short-chain ceramide analogues as probes for sphingolipid biosynthesis and transport」(F.T. Wieland)、「Regulation of phosphatidate phosphatase and overall lipid synthesis in yeast」(G.M. Carman)、「Intracellular flow of (glyco)sphingolipids: Lipid trafficking and cell biological significance」(D.Hoekstra)、「Intracellular transport and turnover of gangliosides」(G. Tettamanti)。発表の締めくくりは、de Haas教授の特別講演「Thirty-three years of superficial enzymology」。van Deenen教授との交流をところどころに折込んだ、しみじみとしたものを感じさせる講演であった。発表終了後、van Deenen教授には会から記念品として額に入った大きな絵が贈られた。最後に、Wirtz教授によるClosing address、そして次回の主宰者からの、カナダでもアメリカでもオーストラリアでもなく、スコットランドのアバディーンに間違いなく来て欲しいとのユーモア溢れるアナウンスと、美しい大学町のスライドによる紹介があって会は閉幕した。(この1994年のICBLに関心のある方は別ページの案内を参照して頂きたい。)今回のICBLの印象を一口で言うと、いかにもオランダらしく合理的に無駄なく、円滑に運営されていたということになろうか。淡々とした中にも暖かさのこもったものでなしと充実した学会内容に、筆者らは心から満足して会場を後にしたのであった。

なお、筆者以外に日本から参加された方々は次のとおりである(敬称略)。飯島憲章(広島大)、池沢宏郎(名古屋市)、井関尚一(金沢大)、井上圭三(東大)、内田勉(群馬大)、小野輝夫(新潟大)、加藤忠広(東理大)、日下喬史(川崎医大)、田口良(名古屋市)、東秀好(三菱化成生命研)、和久敬蔵(帝京大)。

第35回国際脂質生化学会議(ICBL)のご案内

第35回国際脂質生化学会議(ICBL)は、9月6日(火)～9日(金)にかけ、イギリススコットランドのAberdeenにあるAberdeen University, King's collegeキャンパスにおいて、K.W.J.Wahle会頭のもとに開催されます。Aberdeenはスコットランド西北部の北海に面した「Granite City:みかげ石の町」の異名を持つ美しい都市です。

取り上げられますテーマは

- 1) Biochemistry of Polyunsaturated Fatty Acids in Marine and Freshwater Organisms
 - 2) Metabolism of Essential Fatty Acids in Man *in vivo*
 - 3) Free Radicals and Antioxidant Vitamins in Lipid Metabolism
- の3項目です。

詳しい会議の日程については2月に配布されるSecond Announcementにより明らかにされる予定ですので、下記に請求してください。

Secretariat 35th ICBL
Division of Biochemical Sciences
Rowett Research Institute
Bucksburn, Aberdeen. AB2 9SB
Scotland. UK

Tel: +44-224-712751

Fax: +44-224-715349

ORGANISING COMMITTEE



35th International Conference on the Biochemistry of Lipids



First Announcement

September 6th~9th 1994
Aberdeen, Scotland

Chairman
K W J Wahle

Secretary
G G Duthie

Treasurer
A Smith

Members
A K Dutta-Roy
D Rotondo
J R Sargent
I P Williamson

Advisory Members
W R H Duncan
G A Garton
Elsbeth Smith

SCIENTIFIC PROGRAMME

The scientific programme will include plenary lectures by invited speakers and both poster and oral communications. The latter will be selected from the submitted abstracts relevant to the themes of the Conference and the authors will be notified by June 1994.

The themes of the conference will be :

1. Biochemistry of Polyunsaturated Fatty Acids in Marine and Freshwater Organisms
2. Metabolism of Essential Fatty Acids in Man *in vivo*
3. Free Radicals and Antioxidant Vitamins in Lipid Metabolism

Poster communications may relate to the Conference themes or to other areas of lipid biochemistry.

国際会議のご案内

名称： 3rd International Symposium "Multiple Risk Factors in Cardiovascular Disease: Vascular and Organ Protection"

日時： 1994年6月6日~6月9日

開催地： イタリア、フローレンス

- A) トピック： Interaction of Risk Factors - in Population Studies
- Cardiovascular Physiology and Mechanism
- Therapy and Organ Protection (Vascular Wall, Heart, Kidney, Lung, Brain)

B) シンポジウム： 高血圧、高脂血症、喫煙、糖尿病などに関する個別のRisk Factorについて

C) 発表形式： 口頭、ポスター、シンポジウム、ラウンドテーブル討論

申込： Preliminary Program (with Registration and Abstract Forms)が1994年1月に出ておりますので、関心のある方は各自で下記宛に請求してください
MRF'94
FONDAZIONE GIOVANNI LORENZINI - Via Appiani,
7-20121 milan,
Italy
Phone 0039-2-2900-6267
Fax 0039-2-2900-7018

日本脂質栄養学会第3回大会(1994)

日本脂質生化学研究会会則

予告(1)

日 時: 1994年9月2日(金)、3日(土)
場 所: 女子栄養大学 坂戸校舎(東上線若葉駅下車)
プログラム:

Symposium 1 「各種脂肪酸 と 脂質・リポたん白代謝」
Symposium 2 「東南アジアにおける脂質栄養の現状とプロスペクト」
Panel Discussion 「摂取脂質のn-3/n-6脂肪酸比と生体機能」
Workshop 「脂質摂取量の把握法-computer実技(soft, hard)」
大会会長講演 「脂質栄養の国際比較」
一般講演
ポスター セッション

大会会長: 長谷川恭子(女子栄養大学)

演題締め切り: 1994年5月31日(火) 必着 (女子栄養大学)

演題申込・会費振込用紙は「脂質栄養学」3巻1号に綴じ込み。

大会参加費: 会員 1,000円、非会員 3,000円(学生非会員 1,000円)
予稿集 1,000円(会員は年会費に含まれる)
懇親会費 5,000円

会員年会費: 正会員 3,000円 学生会員 2,000円

入会申込先: 〒930-01 富山市願海寺水口 444

富山女子短期大学内 日本脂質栄養学会事務局

桑守豊美 Tel. 0764-36-5146 Fax. 0764-36-0133

大会連絡先: 女子栄養大学 基礎栄養学研究室(〒350-02 坂戸市千代田3-9-21)

第3回大会事務局 総務 川端輝江

Tel/Fax(切替不要) 0492-82-3705

第1条 名 称

本会を日本脂質生化学研究会 (Japanese Conference on Biochemistry of Lipids, JCBL) と称する。

第2条 目 的

本会は脂質の領域における科学的、生化学的研究の発展、向上を図り、あわせ研究者相互の連絡および親睦を深めることを目的とする。

第3条 事 業

本会は、第2条の目的を達成するために次の事業をおこなう。

- (1) 研究討論会の開催
- (2) その他、本会の目的を達成するために必要な事業

第4条 会 員

本会の会員には次の種類がある。

- (1) 正会員は、脂質の化学的、生化学的研究に従事し本会で定めた会費を納入する者。
- (2) 賛助会員は、本会の目的に賛同し、本会を維持することに協力し、本会で定めた会費を納入する者。
- (3) 名誉会員をおくことができる。名誉会員は幹事会の推薦により、総会の承認で決定される。名誉会員の会費は免除される。

第5条 役 員

本会は、その運営のために次の役員をおく。

- (1) 会長1名、庶務幹事1名、会計幹事1名、会計監査1名、幹事若干名をおく。
- (2) 会長、庶務幹事、会計幹事、幹事は幹事会を構成し会務の一切を処理する。幹事会は決定事項を総会に報告し、その承認を得るものとする。
- (3) 会長、庶務幹事、会計幹事、会計監査の任期は2年とし、幹事の任期は4年とする。重任はさまたげない。
- (4) 名誉会長をおくことができる。名誉会長は幹事会に出席して意見を述べるることができる。

第6条 総 会

総会は、会長がこれを招集し、次の事項を審議し、決定または承認する。決定または承認は、総会出席者の半数以上の合意を必要とする。

- (1) 予算および決算に関する事項
- (2) 幹事会の提案事項
- (3) 幹事会の決定に関する承認事項
- (4) その他

第7条 経 理

本会を運営するため、次の如く経理をおこなう。

- (1) 本会の事業年度は、1月1日より翌年12月31日とし、予算および決算を会報に掲載する。
- (2) 経理は会計監査によって、監査される。
- (3) 当該年度の経理状況は、総会に報告され、その承認を得るものとする。
- (4) 本会の経費は会費および寄附金による。

第8条 事 務 局

本会は会務に関する一切の事務をおこなうために事務局を置き、庶務幹事がこれを運営して、会員に便宜を供する。

附 則

- (1) 本会則は、総会の承認を経て変更することができる。
- (2) 本会の会費は、幹事会で決定し、総会の承認を得るものとする。
- (3) 本会の事務局は、帝京大学薬学部薬品物理化学教室に置く。

(〒199-01) 神奈川県津久井郡相模湖町寸沢嵐1091

(平成5年6月4日改正)

研究会事務の取り扱い内容と連絡先

[I] 日本脂質生化学研究会事務局で扱う事務

- 1 Circularの原稿依頼・編集等
- 2 研究集会の演題受付
- 3 要旨集の原稿受付・編集等
- 4 総会・幹事会の案内・資料作成等
- 5 その他

連絡先:

〒199-01 神奈川県津久井郡相模湖町寸沢嵐1091
帝京大学薬学部薬品物理化学教室内
日本脂質生化学研究会事務局
Tel 0426-85-3280
Fax 0426-85-2004

[II] (財)日本学会事務センターで扱う事務

- 1 Circularおよび要旨集の発送とその未着クレームの受付
- 2 年会費の請求および徴収
- 3 所属・住所・氏名等の変更の受付
- 4 入会・退会の受付

連絡先:

〒133 東京都文京区本駒込5-16-9
(財)日本学会事務センター
会員業務部
Tel 03-5814-5810
Fax 03-5814-5825

編集後記

サーキュラーは何時ごろから独立して発行されたのか。はっきりとは分らないが、研究集会発表の演題募集が主たる目的で発行されるようになったことは間違いなく、その限りの役割りは今迄よく果してきたと思う。しかし、会員間の相互連絡という点から考えると、どちらかという、事務局からの事務的なおしらせが中心で、情報の交換などはなかなかむずかしいことが分ってきた。以前は、特に原先生がおられたときは、非常にまめに会員間の意見をくみあげられようとして、努力されておられたように思われる。いずれにしても事務局がここにあることで、研究会は何を目指して今後やってゆくのか、あるいは会員の方達はどうか考えておられるのかなど、会の今後の運営について時々気になって来る。これらのことをもっと筋道たて考えて下さる方がおられると甚だ助かるのだがなと思いながら、この駄文をとじることにします。(S.S.)